学園ヘタリア　青春編

あれま@自己紹介御一読下さい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学園ヘタリア　青春編

【Ｎコード】
Ｎ０２３２Ｓ

【作者名】
あれま@自己紹介御一読下さい

【あらすじ】
リクエストをいただきましたので、此処でＵＰしたいと思います。

説明　前書き（前書き）

通りすがりの殺人機　（敬称略）にリクエストを頂きました。
リク内容「青春してるヘタリアキャラが見たいです」
深読みして性春（失礼　にしようかとも思いましたがあえてここはほのぼのにしました。
短編集もどきです、疎い作品たちですが受け取ってくだされば幸いです。
では。

説明　前書き

部活動・登場人物一覧表

＊A組＊

フェリシアーノ　家庭科部部長
中国　　美術部部長
アルフレッド　美術部

＊B組＊

韓国　　テニス部
ギルベルト　テニス部
菊　　帰宅部
アーサー　バド部

＊C組＊

フランシス　　バド部マネ
アントーニョ　野球部
香港　　家庭科部

あれ、1人だけ部活入ってなかったよ。

名前の人と国名の人が混じってるのは、
名前の変換がうまく行かないとかそんな訳あるはずないんだからｎ
（御黙りなさい

カップリングは
菊フェリ
フラアサ
中国→韓国←香港
ギルエリ
みたいな感じです。

気になるあいつにロイヤルストレートフラッシュ（前書き）

トニョ・・・アントーニョ（スペイン）

フラ・・・フランシス（フランス）

菊・・・本田菊（日本）

アサ・・・アーサー（イギリス）

フェリ・・・フェリシアーノ（イタリア）

ななちゃん・・・モブの猫にゃん（たぶんギリシャあたりの貰った）

気になるあいつにロイヤルストレートフラッシュ

「なんでおじさんはマネージャーやの」

お昼休み。

C組に用があってやってきた菊は、なぜかフランとトニョがやっていたポーカーに無理矢理引き込まれた。

冒頭の台詞を聞いたのは、菊が『あんまり良いのないな』と思いながらカードを吟味し、選別していたときだった。

「おじさん言うな。」

「いまの酷い字面でしたね。」

「いやーだってさ、マネージャーやで？マネージャーつったら、可愛いつるぺた女の子のイメージやん。」

「つるぺた関係なくないですか。」

「そうだぞこのロリコン。」

「おおきに。」

「誉めてない。つか俺がマネだとなんか文句あるわけ。」

「いや、別に。」

「無いんかい。」

一回戦目、菊がワンペア、フランがツーペア、トニョがフルハウス。トニョの勝ち。

「やりい。」

「あー、間違えた。アレ出さなきゃよかったです。」

「ドンマイ菊ちゃん」

「で、フランシスさんはどうしてマネになんかなろうと思ったんですか？」
「え？その話まだ続けるの？」
「俺も興味あるわ。」
「ほら、アントーニョさんも言ってますし。」
「えー…。…そんなの、アーサーがバド部にいるからに決まってんじゃん」
「ハイ終了ー終わりーこの話おしまいでーす！」
「あ、そういや菊ちゃん、こないだのさー…」
「えっ！？ちょっと待ってちょっと待ってそれはそれで複雑な気分。」
「えーなんだよもー」
「フランシスさんのノロケはもう聞き飽きましたー」
「どうせ普通の部員だとプレイ中のアーサーがみれないからとかやろ？」
「ぶっ、プレイ中…！？」
「うわー最悪だなこの人」

二回戦目、菊スリーカード、フランノーペア、トニョワンペア。

「おしゃ。てかフランシスさんｗｗ動揺しすぎですｗｗｗｗ」
「うるさい黙れｗ」
「けど、アーサーねえ…。」
「トーニョ？なんだその言い種は。」
「や、アーサーって普段『アルアル』しか言ってないからさ。」
「菊ちゃんだって『ポチ君ポチ君』言ってるぞ」
「私はフェリシアーノ君を愛してます！」

「うるさい声が大きい」
「ちゃうてさー、俺が言いたいのは、あーさー、は、ちゃんと相手してくれんの？ってことさ」
「相手…だと…！？」
「エロい意味やなくてね。」
「むっつりーむっつりー」
「…ゴホン、いや、普通に、普通だぞ」
「普通？なに、どんな会話すんの。」

三回目、菊ツーペア、フランツーペア、トニョワンペア。
菊のカードの方が強かったので、菊の勝ち。

「やー…、『今日もいい天気だね』とか。」
「うん」
「『アルは今日も可愛いね』とか。」
「うん」
「『アルとアーサーのご飯買ってくるね』とか。」
「……」
「『アル制服新しくした？』とか。」
「……。」
「……。」
「泣かないで下さいフランシスさん。男でしょう。」
「泣いてませんけど！！」
「みゃー」
「「「ん？」」」

四回戦目を始めようとしたそのとき、不意にどこからか猫の鳴き声がして、視線をおろすとフランの足元に見覚えのある猫がちょこんとお座りしていた。

「ななちゃん！」

「みあ」

フランがななちゃんを抱き上げると、それと同時に教室に小走りで入ってくる生徒が。

「ななちゃんっ！いるかっ！？？」

「アーサー！」

「あ、ファニー。」

「みゃあ」

アサはフランに抱き抱えられたななちゃんを見つけると、すぐに飛んできてフランの腕からななちゃんをひったくった。

「よかったー。さっきまで大人しかったのに、急に出て行っちゃったからびっくりしたぜ。ななちゃん、めっ、だぞ！」

「（かわいいなぁ…）もう逃がさないようにね。」

「あー、ななちゃん、噂されてたのに気付いたのかな？」

「噂？」

「ちょ、菊！…なんでもないよ、アーサー。」

「？」

可愛らしく小首を傾げるアーサー。フランはアサの頭を優しく撫でた。　めッちゃ嫌な顔されたけど

「あーさぁ、ななちゃん見つかった？」
「フェリシアーノくん！」
「フェリ！」

続いて入ってきた天使に菊とトニョは同時に反応し、フェリ本人はちょっと面食らってしまった。

「菊。トーニョにーちゃん。」
「なーなーフェリいいい、野球部入ったってーなーお願いー」
「ええっ、だから無理だって言って…」
「そこをなんとか！こないだのホームランハンパなかったんやって！フェリちゃんなら得点王になれる！」
「でも…」
「一生のお願いや！うちの脆弱チームなんとかしたって…！」
「うーん…」
「…ちょっとアントーニョさん、人のものに手出さないで下さいよ★それに大事な子分いるじゃないですか」
「は！？人のもんやて！？違うわ！フェリちゃんはみんなのもんや！みんなのフェリや！」
「いや、俺のですよ」
「みんなのもんや！」
「ちょ、ちょっと、ふたりとも…！僕は誰のものでもないよぉ…」

そんなこんなでフェリが取り合いになっている姿を横目に、アサはなにか言いたげにしているフランの前にななちゃんを抱いて立っていた。

「ふ、ふら「アーサー」

真剣な瞳に呑まれそうになり、アーサーはあわてて瞬きをした。
こういう雰囲気は困る。
フランのかっこよさを意識してしまって、鼓動が早くなって、いつもと同じように振る舞えなくなるから。

どきどきする心臓をななちゃんで押さえつけて、フランの言葉を待った。

「アーサー…」

「今日の部活、スコートはいてきて？」
「ななちゃん往復ぱんち！」

期待したのが馬鹿だった。

気になるあいつにロイヤルストレートフラッシュ（後書き）

学校にペットもって来ちゃいけません。

フェンス越しの恋をしよう

「ギル、今日ご機嫌だな」
「えっ？」

放課後、同じ階段の踊り場の掃除当番だったアーサーにそう言われたギルは、少し驚いた顔をした。

「なんで分かっ……どうしてそう思ったんだ？」
「だって鼻歌歌ってたし。」

「ギルわかりやすー」とアーサーに言われ、どうやら無意識だったらしいギルはかあっと頬を染めた。

アーサーが箒の柄の部分でギルをつついたりしてあそんでいると、不意に上の階から声をかけられた。

「こらー、ちゃんと掃除なさーい」

そう言って降りてきたのは、同じクラスの菊だった。

「「菊。」」
「なにやってるんですか？アーサーさん、ギルベルトさん」
「いやね、さっきっからギルがすごい楽しそうだったから何でかなって…」
「っ、アーサー！！」
「ほうほう、それで？」
「それでもなにも、今日は金曜日だぜ本田。」
「金曜……！あーあ、そういうこと。」

「……」

菊とアーサーのふたりは言わずもがな事情を把握したようで、ふたりして大きく頷いたりしている。
ギルはなんとなくやるせない気持ちになる。

「じゃあ、早くグラウンドいかなくちゃね。」
「…菊までからかうなよ。」
「ていうか私さっき屋上にいましたけど、テニスコートにそれらしい人いましたよ？」
「うそっ！」
「ホントデスヨ。あ、じゃあ掃除今日だけ私代わってあげます？いってっらしゃい。」
「えっ、」
「（すごい嬉しそう…）いいから。」

よっしゃ、と小さくガッツポーズをして、ギルは菊にお礼を言って風のように去っていった。

菊が微妙に親の心境的ななにかに浸りながらギルの後ろ姿を見守っていると、アーサーが隣から胡散臭そうな声で話しかけてきた。

「本田が、なんでまた気まぐれで掃除代わるなんて…」
「じゃっ、あと頑張ってくださいね～」
「あっ、ちょっとほんだぁ！」
「はっ、世界のどこかでフェリシアーノが呼んでる声がする！フェリシアーノ、いまいくよ！しゅばっ」
「えええちょっとほんだぁぁぁぁぁ！！しゅばっじゃなくて！！」

＊　＊　＊

テニスのウェアーに着替えて、後輩たちより早くテニスコートに入ると、南口側のフェンス、そこに、ギルの大好きな人の影が見えて、ギルは嬉しそうに笑いながらそちらへ向かっていった。

「エリザ！」
「やほー」
「今日は早いな」
「お前もね」
「俺は早く来たんだぜ」

優しく笑うエリザの笑顔を見て、ギルは幸せな気持ちになる。高校が違ってしまうと知ったときはものすごくショックだったけれど、これはこれでいいのかも、なんて思って、ギルもエリザににっこり笑い返した。

「ほら、このわたしがきてやってんだからはやく練習しなよ」
「う、あ、おぅ！」

本当はもっと話していたかったけれど、コートに入ってくる何人かの後輩が視界にはいったので、ギルは少し残念に思いながらエリザに手を振る。

「あ、そだ。ギル」

「え、なんだ？」
「部活終わったら、ふたりでクレープ食べいこ」
「！」
なんだかいつもよりちょっと優しいエリザの、放課後デートのお誘いに、ギルは「はい！」と大きく返事をしていまにもスキップしそうな気分でコートに戻っていった。

（愛の二乗）

「韓国、また来てるぜ」
「え、なにが」

空は晴天。気温はちょっと肌寒いけれど、部活動を行うにはちょうどよい気候と言ったところだろう。

先に今日のノルマの筋トレを終えたギルは、韓国の腹筋を手伝いながら眉をひそめて遠くを見た。

「ぎるっち、目悪かったっけ」
「違うわこの天然」

不思議に思った韓国がそちらに目を向けると、校庭からテニスコートにかけた傾斜のかかった芝生の、その木陰に見覚えのある人物を見つけた。

「あ、兄貴。」

彼はスケブをもっていて、風景画を描いているのか、鉛筆を持つ手がひっきりなしに動いていた。
ふと、目が合う。
ゆるりと手を振られたので、韓国も、部活中なので控えめに手を振り返した。
すると、なぜかギルが大きなため息をついた。
「え、え、なぜにため息」

「いや…今日もはじまるなぁと思って。」
「なにが。」
「……決闘？」
「けっとう？」

ギルが腹話の居る方とは少し右にそれた方向をみたので、そちらに視線をむける。

と。

「香港なんだぜ。」
「はぁ…、なにもしらないやつはいいね…」
「なにが？」
「べつにー」

ギルはもう一度ため息をつくと、韓国の膝抱えていた手を離し、立ち上がった。

「さ、かんこくんも今日のノルマおわり！」
「やたー」
「コート入るべ」
「ぎるっち今日こそはぎるるゾーン決めてみて」
「無理。」

テニスコートに向かう時、韓国がちらりと後ろを振り返ると、なにやら中国と香港が話しているようだった。
あきらかに険悪なムードだが、鈍感な彼が気付くわけもなく。

（部活終わったら香港のクッキーたべにいこっと。）

そんな平和なことをのんきに考えていた。

（愛の二乗）（後書き）

韓国を描きにくる中国と差し入れを持ってくる香港。

2人とも一週間に一回とかそのぐらいのペースで気まぐれにやってくるので、はちあわせると静かに喧嘩します。

自然に治まらないので仲立ちはいつもギルです。

水色キャンパス（前書き）

これで終わり

水色キャンパス

放課後、校庭の部活動の声が響く美術室の中に、ふたりの生徒が入ってきた。

ひとりは大きなキャンバスを抱えていて、入るなり慣れた手つきで絵の具の準備を始めたが、もうひとりは少々挙動不審気味なようで、きょろきょろと辺りを見回しては誰かの描いた絵を見て感嘆の声を上げていた。

「すごいね…。わ、これとかすごい。」
「あ、それ描いたの我アル」
「えっ、中国が！？すごい！！」

すごいすごいとはしゃぐフェリを余所に中国は手早く準備をすませ、水でならした絵筆を手に取って、目の前に立たせたモデルのフェリにしれっとした顔で告げた。

「じゃあフェリシアーノ、脱ぐアル。」
「…は？」
「は？じゃないよ、脱いで。」
「えっ、ええええええ？！」

ガタンッと耳障りな机の音を立てて逃げようとするフェリを、中国はその長い足を利用してスルリと捕まえた。

そして、なおも逃げようとする彼の体を左手でがっちりにホールドし、くりあの襟元のきっちりと絞められたネクタイに手をかけた。

しゅるり、

「や、ちょ、中国！」
「フェリシアーノー？いる……」
「「あ。」」

その時、ちょうど美術室の扉を開けた菊は一瞬で固まって。

「……え、なにこの状況。」

優に15秒は浪費してからそれだけ言った。

「ぶちょー、俺の新作を見るんだぞ！！」

すると続いて、菊が開けたのと反対側のドアが蹴破られ、アルが勢い良く入ってきた。

一気に三人の視線がアルに集中する。

沈黙。

「……え、なにこの状況。」

大事なことなので（ｒｙ

＊　＊　＊

「つーん」
「きーくー、違うんだってば。あれはただ絵のモデルを…」
「つんつーん」
「脱ぐなんて、最初は知らなかったの。それに、慎んでお断りした

し…」
「つんつんつーん」
「もー、機嫌直してよー…。…あっ、そういえば！今日調理実習で作ったクランブルマフィンが、たしかまだ余って…」
「でれでれ」
「あ、デレた。」
「でれでれ」
「ああはいはい、今あげるから」

夕日が影を伸ばす午後五時。
菊はフェリの作った極上のクランブルマフィンを頬張りながら、フェリとふたりで帰路についていた。

「菊、今日あんなに早く来なくても良かったのに。週直の仕事あったんでしょ？」
「ふぇふに、ふぐおふぁっふぁひ」
「…飲み込んでからでいいよ。」
「……んぐ、べつにー、すぐ終わったし、残りはギルベルトさんに押し付けた」
「えっ、だめだよちゃんとやらなくちゃ！」
「えー。だって、フェリシアーノ君が密室で男とふたりきりとか心配じゃ無いですか。」
「きっ、菊……！（きゅん）……じゃなくてっ！ダメだよ、週直の仕事はちゃんとやらなくちゃ！結構忙しいんだから。ギルだって部活あるのに…」
「フェリシアーノのほうが部活より大事（キリッ」
「……っ！キュンとさせてごまかしてもだめっ！第一菊は、部活はいってないでしょー！」
「入ってますよ。フェリシアーノを愛でる部の部長。」

「公認されてるのにして！」

夕日とあいまってきれいな朱に染まるフェリシアーノの頬を横目でちらちら眺めながら、菊はクランブルマフィンの最後のひとかけらを口に放り込んだ。

砂糖の甘い固まりが、口の中でふわっと溶けた。

「あ。」

不意にフェリが良いことを思いついたという顔でこちらに顔を向けた。

「なに？」

「菊さ、家庭科部入ってよ」

「はあ、私が？」

「そうだよ。僕が教えるし、いつでも僕のお菓子食べれるよ？」

「うーん、後半は魅力的ですけど、…洋菓子ねえ…」

洋菓子はあまり得意ではない、というかむしろ苦手だ。

考え込んでいると、フェリが少し恥ずかしそうに小声で言った。

「それに…、その方が、ずっと一緒にいられる。」

「！」

その時ちょうど、風が強く吹いて、フェリが目を瞑った。

菊は世界で一番甘いその桜色を、唇で、ちゅ、と掠め取った。

＊　＊　＊

その頃、美術室では中国がアルの絵を見ていた。

「……」
「な、どうどう？！ぶちょー！今回はイケるっしょ！」
「…色の配置が悪い、構成が悪い、パースがとれてない。全然ダメアル」
「えーっ」
「えーじゃないアル！だいたいアルはこれ、なにを表現したいの？」
「俺のすべて！」
「……。」

中国は大きなため息をついて、描きかけのキャンバスを見つめた。
隣ではアルがまだなにか騒いでいたが、持ち前のスルースキルでシャットアウト。

（背格好は似てるから、いけると思ったんだけどなぁ）

キャンバスの中の蒼い世界に佇んだ、人になりきれていない誰かを見つめて。

（やっぱり、韓国本人に頼んだ方がいいかなぁ…）

そこまで考えて、中国はキャンバスを乾燥棚に置き、筆を洗うために水道場へと向かった。

水色キャンパス（後書き）

これでこの短編集は終わりです、
リクエスト、有り難うございました

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0232s/

学園ヘタリア　青春編

2011年10月6日14時21分発行